

2019
12/14
13:00~17:20 (土)
開場 12:30

定員 110名
使用言語 日本語／スペイン語 逐次通訳あり
場 所 東京文化財研究所地下セミナー室
東京都台東区上野公園13-43

申込不要
先着順無料

アンデスの黄金
ナスカの地上絵
インカのミイラ

ペルーの文化遺産 保護の最前線



ペルー日本人移住120周年・日本ペルー交流年記念シンポジウム



プログラム

- 13:00-13:20 主催者挨拶・趣旨説明
13:20-14:00 基調講演 「考古学を通じた日本とペルーの文化交流」
加藤 泰建 (埼玉大学)
- 第1部 司会：井口 欣也 (埼玉大学)
14:00-14:50 「チョトゥーナ遺跡とチョルナンカップ遺跡
— 調査、保存そしてコミュニティにおける価値付け」
カルロス・ウェステル・ラ・トーレ (ペルー国立ブルーニング考古学博物館)
- 14:50-15:20 「パコバンパ遺跡 — 金製品の発見と地域文化遺産の保護」
関 雄二 (国立民族学博物館) / ダニエル・モラーレス (ペルー国立サン・マルコス大学)
- 15:20-15:40 休憩
第2部 司会：関 雄二
15:40-16:30 「レイメバンパー コミュニティを巻き込んだ博物館活動」
ソニア・エリザベス・ギジェン・オネエグリオ (ペルー国立考古学人類学歴史博物館)
- 16:30-17:00 「ナスカ — 地上絵の調査、発見そして保存」
坂井 正人 (山形大学) / ホルヘ・オラーノ (パリ第一大学)
- 17:00-17:20 挨拶 井口 欣也

アクセスマップ



- JR上野駅「公園口」より 徒歩15分
- JR鶯谷駅「南口」より徒歩8分



南米ペルーは、インカに代表される古代アンデス文明が成立した場所として知られ、日本人研究者も60年以上にわたって研究調査を続けてきました。

本シンポジウムでは、金製副葬品を伴う貴人墓や、世界文化遺産ナスカの地上絵、そしてインカ時代のミイラなど、近年の発見に触れるとともに、出土した遺構や遺物を地域住民とともに守り、活用する取り組みを紹介します。

文化遺産とコミュニティとの共生、そして持続的活用を模索する事例をとおして、21世紀における文化遺産のあり方を探りたいと思います。

プロフィール



ソニア・エリザベス・
ギジェン・オネエグリオ
Sonia Elizabeth Guillén Oneeglio

ペルー国立考古学人類学歴史博物館長

ペルーを代表する自然人類学者。
1997年にペルー北部アマゾンナス州のラグーナ・デ・ロス・コンドレス湖に面した断崖で、数百におよぶインカ期のミイラを発見した。NGOを組織し、レイメバンバ博物館を建設。地域住民とともにミイラや考古遺物の保存に努める。



カルロス・ウェステル・
ラ・トーレ
Carlos Wester La Torre

ペルー国立ブルーニング考古学博物館長

ペルーを代表する考古学者。
2012年にペルー北海岸ランバイエケ地方チョルナンカップ遺跡で、大量の金製品を伴う女性の埋葬を発見した。自らが館長を務める博物館で展示するとともに、地域住民と保存活動に従事している。



加藤 泰建
Yasutake Kato

埼玉大学名誉教授

専攻は文化人類学・アンデス考古学。
1975年より東京大学アンデス調査団のメンバーとして発掘調査に参加。
1998年より埼玉大学クントウル・ワシ遺跡プロジェクトリーダーとして発掘調査、遺跡の保存修復などを行う。



関 雄二
Yuji Seki

国立民族学博物館副館長・教授

専攻は文化人類学・アンデス考古学。
1979年以来、南米ペルー北高地において神殿の発掘調査を行い、アンデス文明の成立過程を追うかたわら、文化遺産の保護と活用にも取り組む。



坂井 正人
Masato Sakai

山形大学学術研究院教授、
山形大学ナスカ研究所副所長

専攻は文化人類学・アンデス考古学。
1989年よりペルー共和国の考古遺跡で発掘調査に従事し、2004年よりナスカ地上絵に関する学際的な研究調査を行う。



井口 欣也
Kinya Inokuchi

埼玉大学大学院人文社会科学研究所教授

専攻は文化人類学・アンデス考古学。
1988年より東京大学アンデス調査団のメンバーとしてクントウル・ワシ遺跡の発掘調査に参加。